



も と 子 と 人 婦
 號 壹 第 卷 四 第

ばら 姫 物 語

やまとの翁

むかしもく大むかしのこと
 まづある處に、一人の殿様があ
 りましたとさ。なか／＼威勢の
 いゝ殿様でしたが、たゞ一つの
 不幸なことに、一人も子とい

ふものがあります。夫で、奥様と二人で、毎日毎晩、そのことばかりいって歎いて居りました。所が、ある日のこと、奥様が一人で、お湯を使いながら、やはり、その事について、考へて居らっしゃると、そこへ、ひょいと、一匹の蛙が飛び出して来て、妙な風に両手をついて、奥様に申し上げるには

「奥様、そんなに御心配なさらんでも、來年のお正月には、きつと、美しいお嬢さんがお生れになりますよ」

奥様は、夫をおき、遊ばして、はて妙なことを聞くもんだなと、れぼしめして居らしたが、やがて、その年もくれて、あくる年のお正月になりました所が、ちゃんと蛙の言った様に玉の様なお姫様が、お生れになりました。

奥様のお喜び、殿様のお喜びは申すも愚なこと、多勢の家來どもまで上を下へと喜んで居ります。お正月のお祝ひに、かへく加へて御安産のお祝といふので。

そこで、殿様は、其お祝をなさるといふので、大勢の御親類がたやお友達をお招きになりました。處が、其所に、十三人の魔術使ひの賢女があるから、これも一所にお招きをするといふ事でしたのが、相憎、殿様のお手許には、此婦人方に食べさせる金のお皿が、丁度十二枚しかないといふので、一人を残して、十二人丈をお招きになりました。

さて、其晩になりますと、案内を受けた人は、皆集つて來まして、立派な宴會が始まりました。しますと、十二人の賢女た

ちは、皆一人づゝ立って、此赤兒の前途の運を祝します。一人
 は、まづ『徳高かれ』と祝ひますと、次の賢女は、『美しかれ』
 と祝ふと次には『富み榮へよ』といふ様に、皆が揃って世界
 中で出来る丈けの賜を以て、前途を占ひます。さて、だん
 この様に致しまして、丁度十一人目の賢女か祝って仕舞った所
 へ、丸で電光の様に、其席へ飛び込んで来た女があります。誰
 かと見ると、彼のとり残された一人の魔法使ひでしょう。自分
 がとり残されたといふのを、ひどく恨みに思つて恐ろしい面相
 をして、此席へやゝ参つて、大きな聲を上げて叫びました
 『いや皆さん、此お姫様は生長くなって、十五年目の誕生日が
 來ますと、紡錘のために、屹度死んで仕舞います』



かういふや否や、彼女はもう何
もいはないで、ツイと出てしま
ひました。

まー、何といふ不吉な占ひで
しよー。折角皆が、あの様に、
末のことを、壽ほぎ祝って居た
所へ、こんな恐しいことをいは
れたので、皆が一同に慄い上る
位、恐れました。所が、そこに
居った十二人目の賢女は、徐か
に立って、自分のお祝ひを申し

ました。然し、もはや彼の悪女の言つたことをうち消すことは出来ないので、次の様にいて、それを弱くしようと思いました。

『いへ皆さん、ご安心なさい、姫は決して、死ぬのではありません。せん、たゞ、百年の間眠る許りなのです』

* * * * *

夫から、殿様は、どうかして、十五年目の災難を逃れさせた
いと考へまして、國中に命令して、紡錘といふ紡錘は、一切焼
き捨てよと命令しました。

年月の経つのは、早い者で、姫は、だんく生長します。生
長するにつれて、彼の誕生祝ひの占ひが、ことごとく當りまし
て、まこと、賢女の祝った様に、しとやかで、美しくって、怜

惻で柔順で、夫はく立派なお姫様になりました。所が、生れ
てから、丁度十五年目の誕生日がきた時、殿様と奥様とは、お
留主になって、お姫様一人、御殿に居りまして、廣いお城の中
を、こゝかしこと、方々を歩いてごらんになって居ました所が
そのお城の片隅の所に、古い塔がありましたので、お姫様は、
此塔の戸を明けて、其中に、這入って見ました。

所が、不思議なことには、其中に、一人の老婆が居て、せつ
せと麻を紡いで居ります。はて、妙なことをして居るなと思し
召して、お姫様は、何氣なく、其側に寄つて、

「こんなに、糸が巻き付いて廻はって居るのは何？」
というて、その紡錘を取って、御自分で、廻はして見ようとし

ました所が、忽ち彼の不吉の占ひが當つた。と申すは、八 姫は、
 其紡錘のために、一寸、指を刺しました。ハツと思ふと同時に
 其處にあつた寢臺にうち倒れるが最期、と一く深い一く長い
 眠に陥つて仕舞ひました。

所が、此眠りは、たゞお姫様一人に留まらないで、御殿中残
 らずに擴がりました。殿様と奥様とは、此時丁度御還御になつ
 た所でしたが、御室に這入るや否や、眠つて仕舞ひました。夫
 から、家來どもも残らず、一所に眠り込みました。まだ驚くべ
 きことは既に居る馬から、軒に留つて居る鳩から、壁にすがつ
 て居る蠅から、おまけに、燃はて居た火まで動かなくなる、料
 理番が、臺所で、戯に、女中の髪を引っ張つて居たのが、其儘

うち倒れて、二人とも、グー／＼いひきをかき始める、風まで
 が全く已んで仕舞って、丁度落ちかゝって居た木の葉が、途中
 で留って居るといふ不思議さ。

* * * * *

年月が、だん／＼経つに従って、此御殿の周圍には、一面に
 荆棘の木が生ひ茂って、誰も入り込むことも出来ねば、中の容
 子までも、さっぱり見えない位でした。たゞ美しいばら姫の
 ことは、誰いふとなく、國中に擴って居ますから、時々、吾こ
 そ、彼の姫を救ひ出さんと企てる者がありました。誰も／＼
 此荆棘の茂みの中に這入っては、出ることも進むことも出来な
 くなって死んで仕舞ったといふ事です。

夫から、何年か経つた後のこと、或日一人の少年が、此土地に來まして、一人の老人に遭つた所が、老人は、何かの序に此荆棘御殿の話をして聞かせました。即ち此の荆棘の茂みの中には立派な城があつて其中には、ぼら姫といつて奇麗なくお姫様が、も一彼れこれ百年も眠つて居らっしゃる、殿様も奥様も、其他御殿のものは、残らず眠つて居る、夫から、其老人が自分のお祖父さんから聞いた所によると、今迄何人とも數知れぬ程の少年が、此中に入り込んだなり、死ん仕舞つたといふ様なことを咄しました。

此物語を聞いた少年は、『夫では、私が、之から入り込んで見よう』と言ひ出しました。老人は吃驚して、今迄何人となく、

死んだ事故、とても、駄目だといって、とめました。中々やめ相にもありません。

所が、此時は、お姫様が眠って百年目に當って居て、丁度お姫様が、目をお醒ましになる年であったのです。夫で、少年が支度をして、荆棘の中に潜り入らうとしました所が、不思議なことに、さしも、今迄は、入り込め相にもなかつた所の、荆棘の茂みが、獨り手に左右に開いて道を開けます。夫で、少年は、づんく進んで行つて、とーく御殿に這入って見るとなる程、聞いたに違はず、すっかり眠って居る。まづ例の馬から犬から、軒に居る鳩を始め、じーっと寝込んで居る。室に這入って見ると、蠅が壁にひつついたなり眠って居るし、臺所に

は、料理番が、女中の髪を握んだなり眠って居る。構はずに、尙奥へ進むと、殿様の居間には殿様始め奥様から家來ども残らず寢入って居る。こんな具合ですから其静な事といったら、丸で、自分のつく息の音さへ聞える位であります。少年は、だんく方々を見廻はりました、とーく彼の古塔の所までやって來まして、入口の戸を開けた所が、こゝには彼のぼら姫が、寢臺によりかゝったなり、静かに眠って居ります。少年は、一目見て、さては之が、有名なぼら姫だと思つて、恐るく側によつて抱き起さうとしました所が、其拍子に、姫は、はつと目を醒ました。

で、少年は、手短かに、自分の來た譯を語つて、夫から、二

杭生



御殿

人つれだつて、御殿の方へと來
 ました所が忽ち、殿様と奥様と
 續いて家來共まで、目を覺まし
 て、皆不思議相な顔をして、互
 に見較べて居ります、さし、こ
 一なるといふと、今まで眠つて
 居った馬が、ヒーンと鳴いて、
 身を慄はして居るし、犬は尾を
 振つて驅け始め、軒に居つ
 た鳩は、頭を羽の下から出して
 來て、一寸見廻はして、飛んで

行くし、蠅は壁を離れて、這ひ出しまするし、火も燃え始めれば、女中は、引っぱられた頭の髪を、ふりほどいて大根を煮かゝる、料理番は、ハッハッハッと笑ひながら魚の料理にかゝるといふ騒ぎで、御殿中は又元の様に、賑かになつて、しかも誰一人、變つた事のあるたといふ事に、氣が付くものがない。何故かといふに、百年の間、眠つた儘で、別に、誰も、變つて居ないからです。

此少年といふのは、隣國の殿様の公達でして、お仕舞に、ばら姫と、御夫婦になつて、いつまでもく御繁昌にお暮しになりましたとき。

めでたしく